

一第93編 一伊勢内宮と門前の俗世界

平成25年式年遷宮^{*1}直後の伊勢内宮であった。かつては、年末に両親とともによく訪れたものだ。その頃は人も少なく、五十鈴川に架かる木橋を渡り、掃き清められた外宮、内宮一带をお参りする清々しさに心が洗われ、その度ごとにこの国独特の宗教世界を味わった。私にとって20年毎の式年遷宮も2回目だが、世界の中でも自然と建築がこれほど共生している例を他に知らない。



写真93-1 別宮多賀宮（たかのみや）

時空を超えた持続可能という概念を、朽ち果てる建築材料を前提に建て替えるシステムが2つの敷地を得て交互に行われる。ここでは、金物を使わない木造建築の技術の伝承が確実になされてきた。もちろん、そこには国家神道としての秘め事が隠蔽され、1300年の時間を超える永遠性という俗事を超越した概念がこの空間に可視化される。

*1
式年遷宮：伊勢神宮で定期的（原則として20年ごと）に行われる遷宮



写真93-2 五十鈴川

この二元的な世界の境界が清流五十鈴川である。そこを渡るための橋さえ定期的に架け変えられる。その鳥居の門前に繰り広げられる俗事の世

界は、当然のようにある種の伝統を受け継ぎながら、現世を激しく反映している。溢れる人並みに身を委ねながら、飲む、食べる、買うという日常の行為が高揚感とともに増幅される。そのように用意された舞台で共有される宗教的疑似体験と世俗的欲望を交互に満たしながら、心の片隅で翌年への幸せや成功の祈願を行っている。これを誰もが確認しながら、日常への家路につくのである。

この圧倒的なブランドの榮に浴する門前町でさえ、商業的な変身を繰り返す。繰り返しながら、競争と時代の需要に挑む。伊勢の街並みの伝統は、こうしていつまでも続いていく。



写真93-3 伊勢おはらい町通り



写真93-4 おはらい町から五十鈴川を垣間見る